

# イライジャ - ナンバー・ナイン

## 預言者は嘘をついた

Jeff Pippenger

2023-10-11

前回の記事は、「偽りの霊」を扱う一節で締めくくりました。以下はその一節に含まれる段落の一つです。

聖められていない牧師たちは、神に敵対して立ち向かっている。同じ口でキリストとこの世の神をほめたたえている。表向きはキリストを受け入れると公言しながら、バラバに与し、その行いによって「この人ではなく、バラバを」と言っている。これらの言葉を読むすべての者は、心して注意せよ。サタンは自分のなし得ることを誇ってきた。彼は、キリストがご自分の教会にあるようにと祈られた一致を解体しようと企んでいる。彼は言う、「私は出て行って偽りの霊となり、できる者は誰でも欺き、批判し、断罪し、捏造しよう」と。大いなる光と大いなる証拠を与えられてきた教会が、欺きと偽証の子を迎え入れるなら、その教会は主が送られたメッセージを捨て去り、最も不合理な主張と虚偽の仮定と誤った理論を受け入れることになる。サタンは彼らの愚かさをあざ笑う。彼は真理が何であるかを知っているからである。『牧師たちへの証言』409

「『欺きと偽証の子』が大いなる光と大いなる証拠を与えられてきた教会に受け入れられるなら、その教会は主が送られたメッセージを捨て、最も不合理な主張と誤った仮定、虚偽の理論を受け入れる。」1863年、ミラライト派アドベンチズムは、背教的なプロテスタント主義が用いた不合理で虚偽の方法論へと「回帰」し、レビ記26章の「七つの時」に関するウィリアム・ミラーの解釈を退けた。「回帰」という主題は、彼らが頭を立ててエジプトへ戻ろうと決意した民数記14章の反逆者たちによって表されていた。

そして彼らは互いに言った。「指導者を立てて、エジプトに帰ろう。」民数記14章4節  
背教したプロテスタントイズムへ「戻る」という主題は、エレミヤによっても表されていた。第十五章で、彼は、墮落したプロテスタントたちは彼のもとに戻ることができるが、彼は彼らのもとに「戻って」はならないと告げられた。

わたしは嘲る者の集まりに座らず、喜びもしなかった。あなたの御手のゆえに、わたしはひとりで座っていた。あなたがわたしを憤りで満たされたからである。なぜわたしの痛みは絶えず、わたしの傷は癒されることを拒んで癒しがたいのか。あなたはまったくわたしにとって偽り者のようになり、涸れてしまう水のようになられるのか。ゆえに主はこう言われる。もしあなたが立ち返るなら、わたしはあなたを再び連れ戻し、あなたはわたしの前に立つであろう。もしあなたが卑しきものから尊いものを取り分けるなら、あなたはわたしの口のようになる。彼らをあなたのほうに立ち返らせよ。だが、あなたは彼らのほうへは立ち返ってはならない。わたしはこの民に対してあなたを堅固な青銅の城壁とする。彼らはあなたに向かって戦うが、あなたに勝つことはできない。わたしがあなたとともにいて、あなたを救い、救い出すからである、と主は言われる。エレミヤ書 15:17-20

背教的なプロテスタント主義に戻らないという原則の、最も明瞭な預言的な例証は、不従順な預言者の物語に見いだされる。彼は、北の十部族の初代の王であるヤロブアムに、戒めの言葉を告げた。

王は神の人に言った。「私の家に一緒に来て、休息なさい。あなたに報いを与えよう。」神の人は王に言った。「たとえあなたの家の半分を私にお与えになっても、私はあなたと共に家に入らず、この場所でパンを食べず、水も飲みません。『パンを食べるな。水を飲むな。来た道を通して引き返すな』という主の言葉によって私に命じられているからです。」そこで彼は別の道を行き、ベテルへ来た道を通しては戻らなかった。列王記上 13:7-10

不従順な預言者は、来た道に戻ってはならないと神から告げられていた。ミラー派アドベンチズムは、サルデスに代表されるプロテスタントから出てきたものであり、そこへ戻ってはならなかった。不従順な預言者は、来た道に戻ってはならないことをよく知っていたが、ヤロブアムの王国の偽預言者が来て、神が「その不従順な預言者は偽預言者の家に戻り、彼と一緒に食事をすべきだ」と言われたのだと告げた。神の指示に逆らって、彼はまさにそのとおりにした。彼が偽預言者の食物を食べ始めると、聖書ははっきりと、サマリアの預言者が偽っていたと記している。

さて、ベテルに一人の老いた預言者が住んでいた。その子らが来て、その日神の人がベテルで行ったすべてのわざを彼に告げ、また、彼が王に語った言葉も父に告げた。父は彼らに言った、「彼はどの道へ行ったのか。」ユダから来たその神の人がどの道を行ったかを、その子らは見ていたからである。彼はまた息子たちに言った、「私のろばに鞍をつけなさい。」そこで彼らは彼のろばに鞍をつけ、彼はそれに乗って、神の人の後を追って行った。そして彼が樅の木の下に座っているのを見つけ、彼に言った、「ユダから来た神の人はあなたか。」彼は言った、「私です。」その預言者は彼に言った、「私の家に一緒に来て、パンを食べなさい。」彼は言った、「私はあなたと一緒に戻ることも、あなたのところへ行くこともできません。この場所であなたと一緒にパンを食べることも、水を飲むこともできません。主の言葉によって私にこう言われているからです。『そこでパンを食べてはならず、水を飲んではいけません。来た道を引き返して行ってはいけません。』」彼は彼に言った、「私もあなたと同じく預言者だ。主の言葉によって御使いが私に告げた。『彼をあなたとともにあなたの家に連れ戻し、パンを食べさせ、水を飲ませよ。』」しかし、彼は彼に嘘をついた。そこで彼は彼と一緒に戻り、彼の家でパンを食べ、水を飲んだ。列王記第一 13:11-19。

不従順な預言者はサマリアの偽りの預言者と共に飲み食いした。つまり、彼は背教した預言者のメッセージを受け入れ、主のメッセージを退けたのである。それはその日、彼自身が忠実に伝えたばかりのメッセージであった。彼は戻ってはならないことを重々承知していたが、それでもそうしてしまった。ホワイト夫人は次のように教えている。「大いなる光と大いなる証拠を与えられてきた教会が『欺きと偽証の子』を迎え入れるなら、その教会は主が送られたメッセージを捨て去るであろう。」ミラー派の歴史において、第一の天使はその栄光によって地を照らした。1840年には、第一の天使のメッセージは世界中のあらゆる宣教地にまで運ばれた。

「主がまもなく力と大いなる栄光をもってこの世界に来られるという知らせは真理であり、1840年にはそれを宣べ伝える多くの声が上がった。」Manuscript Releases, 第9巻, 134.

その後、ミラー派アドベンティズムは背教したプロテスタント主義の方法論という「偽り」へと回帰し、神がウィリアム・ミラーを通して送った「主のメッセージ」を捨て去った。彼らはエリヤによって提示されたモーセのメッセージを捨て、ミラー派の歴史の初めに受け入れられた「偽り」は終わりに信じられる「偽り」を表している。それはラオデキア的アドベンティズムに強い惑わしをもたらす「偽り」である。

また、滅びる者たちには不義のあらゆる欺きが働く。彼らが救われるための真理への愛を受け入れなかったからである。このゆえに、神は彼らに強い惑わしを送り、偽りを信じさせる。それは、真理を信じず、不義を喜んだすべての者がさばかれるためである。テサロニケ人への第二の手紙 2:10-12.

私たちは、聖書の預言で第六の王国が支配する時期に、プロテスタント主義の角と共和主義の角の並行する歴史と結びつけて、象徴としてのエリヤの役割を示そうとしている。少なくとも私にとって、1863年のすべての問題を預言的に一つにまとめることの難しさは、「回りくどい論理」の概念に近い、相互に関連するさまざまな筋道にある。単純明快な論理がいつも最善のアプローチだが、神の真理を見出し、その真理同士の間を見極めることは難しい作業である。というのも、それらは聖書の中で「ここに少し、あそこに少し」と見いだされるからである。

だれに知識を教えるのか。だれに教えを悟らせるのか。乳離れした、乳房から離された者たちに。なぜなら、戒めに戒めを重ね、戒めに戒めを重ね、定めに定めを重ね、定めに定めを重ね、ここに少し、そこに少し、としなければならないからである。イザヤ書 28:9、10.

対象読者が、取り上げている根本的な真理に精通している人たちと、すべてが初めての人たちとで構成されている場合には、やはり難しい仕事になる。本文で概説しようとする真理のほぼすべては、ハバククの石板に載っている。『回りくどい理屈』を用いているように聞こえるのを避けるため、実際にそこへ行く前に、これからどこへ向かうのかを前もって述べておく。

1863年、ラオデキアのミラー派アドベント主義は、ねたみの像を立てた。ねたみの像は、ラオデキアのアドベント主義における四つの世代の第一世代を表している。

すると彼は私に言った。「人の子よ、今、北の方に向かって目を上げよ。」そこで私は北の方に目を上げて見ると、見よ、北の方にある祭壇の門の入口に、このねたみの像があった。エゼキエル書8章5節。

セブンスデー・アドベンチスト教会の四つの世代は、聖書のさまざまな箇所を示されていますが、私は主たる参照箇所としてエゼキエル書8章を用います。その理由は、8章が9章へと続いているからです。エゼキエル書9章では、十四万四千人への印づけが示されており、『証言』第5巻でホワイト夫人はこの事実を明確に指摘しています。ホワイト夫人の記述では、印づけが行われるとき、エルサレムには二種類の礼拝者がいることが明確

に述べられています。エゼキエルも同様で、印を受けない側の人々は8章において表されています。

自分自身の霊的な退歩を痛まず、また他者の罪を悼みもしない者たちは、神の印を持たないままにされる。主はその使者、すなわち手に殺戮の武器を持つ者たちに命じられる。「彼の後を追って町の中を行き、打て。容赦するな、憐れむな。老いも若きも、処女も幼子も女も、ことごとく殺せ。ただし、印のある者には近づくな。わたしの聖所から始めよ。」そこで彼らは、家の前にいた長老たちから始めた。

ここで私たちは、教会-主の聖所-が、神の怒りの打撃を最初に受けたことを見る。長老たち、すなわち神から大いなる光を与えられ、民の霊的利益の守護者として立ってきた者たちが、その信任を裏切っていた。彼らは、昔のように奇跡や神の力の顕著な現れを求める必要はない、という立場を取った。時代は変わったのだ。この言葉が彼の不信を強め、彼らは言う。「主は善も行わず、また悪もしない」。主はあまりにもあわれみ深く、ご自分の民に裁きをもって臨まれることはない、と。こうして、「平安と安全だ」という叫びは、二度とラッパのように声を上げて神の民にその背きとヤコブの家にその罪を示すことのない人々から発せられる。吠えようとしないこの物言わぬ犬たちこそ、侮られた神の正しい復讐を受ける者である。男たちも乙女たちも幼子たちも、皆ともに滅びる。『証言』第5巻、211。

第八章は、エルサレムにいる人々-すなわち「教会」-を描写しており、四つの世代のうち第四の世代において、彼らは太陽にひれ伏す者として表されている。

彼はわたしを主の宮の内庭に連れて行った。すると見よ、主の宮の戸口、玄関と祭壇の間に、およそ二十五人の男がいて、彼らは主の宮に背を向け、顔を東に向けて、東の方の太陽を拝んでいた。そこで彼はわたしに言った。「人の子よ、これを見たか。ユダの家にとって、彼らがここで行っているこれらの忌むべきことは、取るに足らないことだということか。彼らはこの地を暴虐で満たし、再びわたしを怒らせることに立ち返った。見よ、彼らは枝を鼻に当てている。それゆえ、わたしも激しい怒りをもって対する。わたしの目は容赦せず、憐れみもしない。たとえ彼らが大声でわたしの耳に叫んでも、わたしは彼らを聞かない。」エゼキエル書 8:16-18。

十人の斥候の悪い報告のときと同様に、太陽を礼拝している反逆の指導者である二十五人は、主の怒りを「挑発」した。預言者たちが将来に向けて指し示している「挑発の日」とは、日曜令のことである。第九章は第八章を反復し拡大しているにすぎないので、同じ時点で神の印を受ける者たちについて述べている。

「神のしもべたちに対するこの封印（黙示録7章）は、幻のうちにエゼキエルに示されたものと同じである。」『牧師たちへの証言』445頁。

1863年、ラオデキア的アドベンチズムの第一世代は荒野をさまよい始めた。1863年の「ねたみの像」を示す預言的歴史は、アロンの金の子牛であった。金の子牛の預言的特徴は、それが獣の像であり、かつ金であったという点である。金はバビロンの象徴であるゆえに、アロンの金の子牛はバビロンの獣の像であった。獣の像とは、教会が主導権を握るかたちでの教会と国家の結合としてのみ定義される。

しかし、「獣への像」とは何か. それはどのように形づくられるのか. 像は二本の角を持つ獣によって作られ、獣への像である. また「獣の像」とも呼ばれる. したがって、その像がどのようなものか、またそれがどのように形づくられるのかを知るためには、獣そのもの-すなわち教皇制-の特性を研究しなければならない.

初代教会が福音の単純さから離れ、異教の儀式や慣習を受け入れて墮落したとき、教会は神の霊と力を失った. そして人々の良心を支配するために、世俗の権力の支持を求めた. その結果として現れたのが教皇制であり、教会は国家の権力を支配し、それを自らの目的、特に「異端」を処罰するために用いた. 合衆国が獣の像を形成するためには、宗教勢力が世俗政府を支配し、国家の権威が教会によっても自らの目的を達成するために用いられるようにしなければならない. The Great Controversy, 443.

アロンが作った子牛は、モーセが十戒を授かっていたときに作られた. 第二の戒めは偶像礼拝を禁じ、また、神をねたむ神とすることで神の性質の一部を示している.

あなたは、自分のために刻んだ像を造ってはならない. 上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水の中にあるものの、どんな形も造ってはならない. あなたはそれらにひれ伏してはならない. それに仕えてはならない. あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるからだ. わたしを憎む者には、父の咎を子に、三代四代にまで報い、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千の者にまで慈しみを施す. 出エジプト記 20:4-6.

アロンの金の子牛の像は、偶像であるがゆえに、ねたみの像を表している. というのも、それはモーセに十戒の最初の二枚の石板を投げ下ろして打ち砕かせる義憤を引き起こしたからである. 私たちは、1863年の偽の図表が、アロンの金の子牛によって象徴されていたことを示そうとしている. 神のねたみはアロンの金の子牛に対して現された. というのも、その金の子牛は偽りの神を表していたからである. その子牛は神の偽りの像であった. アロンは、それが彼らをエジプトの奴隷状態から救い出した神々を表していると宣言した. まさにその歴史の中でモーセが打ち砕いた二枚の石板は、実際に彼らをエジプトから導き出した真の神の品性の写しであった. 1863年に作られた偽の図表は、ねたみの像である. というのも、それはモーセの誓いの七つの時を取り去ることによって、ハバクク書2章の二つの板を打ち砕いたからである.

「私は、1843年の図表が主の御手によって導かれ、改変してはならないこと、数字は主の御心のままであったこと、また、主の御手がそれを覆っていくつかの数字にある一つの誤りを隠し、その御手が取り去られるまで誰にもそれが見えないようになっていたことを見た.」『初期の著作』、74、75.

さらに、エレン・ホワイトは、1843年の図表を改変してはならないという命令に、「靈感による場合を除く」という但し書きを付け加えている.

私は、古い図表は主によって導かれたものであり、神からの靈感によらない限り、その数字の一つたりとも変更されるべきではないことを見た. 私は、図表の数字は神が望まれるとおりであり、いくつかの数字にある誤りの上に御手が置かれてそれを覆い隠しており、その御手が取り去られるまで誰一人それに気づくことがないようにされているのを見た. Spalding and Magan, 2.

ジェームズとエレン・ホワイトは、オティス・ニコルの家族と共に暮らしており、ニコル家が1850年の図表を準備し作成したのもその時期であった。1850年の図表で「改められた」のはただ一つ、1843年の図表に掲げられていた「1843年」という年を「1844年」に置き換えたことだけであった。「改められた」唯一の点は、神が御手で覆っておられた「誤り」の訂正だった。1843年の図表が1850年の図表へと「改められた」まさにその家に、女預言者の靈感はあった。そしてレビ記26章の「七つの時」は、1843年の図表にあったのと同様に、その図表にも変わらず記されていた。

第二の戒めは、この預言的な謎の別の一片を含んでおり、神が起こった不義を罰しに来られるまで、代を数えておられることを示している。1863年には、その時点でミラー派運動が終わったため、セブンスデー・アドベンチスト教会の四世代のうち最初の世代が始まった。

十戒の二枚の石の板は、ハバククの二枚の板を象徴しているが、同時に五旬祭の二つの揺り供えのパンも象徴している。これは聖所の儀式において、罪を含んだ唯一の供え物であった。十戒が与えられたときの神の力の顕現、五旬祭の聖霊の注ぎ出しにおける神の力の顕現、そしてミラー派の二つの図表の歴史における神の力の顕現は、すべて、後の雨における聖霊の注ぎ出しの最終的な顕現を象徴している。五旬祭の二つの揺り供えのパンは、後の雨の時に旗印として高く掲げられる十四万四千人を表している。

五旬節の揺り動かすささげ物のパンは、「パン種」（罪を象徴するもの）を入れて作らなければならなかったが、そのパン種は焼く過程で滅ぼされた。

その間に、数えきれないほどの群衆が集まり、互いに踏みつけ合うほどになったとき、彼はまず弟子たちに言い始めた。「パリサイ人のパン種に気をつけなさい。それは偽善である。」ルカ 12:1.

揺り動かす供え物のパンは初穂のささげ物でした。

あなたがたは、自分たちの住まいから、十分の二の分量の揺り動かすパン二つを携え出さなければならない。上等の小麦粉で作し、パン種を入れて焼いたものでなければならない。これは主への初穂である。レビ記 23:17

十四万四千人は、終わりの日々の初穂の捧げ物である。

そして私は見た。見よ、小羊がシオンの山に立っており、彼とともに十四万四千人がいて、その額には小羊の父の御名が記されていた。私は天からの声を聞いた。それは大水の轟きのようにあり、また大いなる雷鳴の声のようであった。また、琴弾きたちが琴を奏でる声を聞いた。彼らは御座の前で、また四つの生き物と長老たちの前で、まるで新しい歌のようなものを歌った。しかしその歌を学ぶことができたのは、地から贖い出された十四万四千人のほかには誰もいなかった。これらの者は女によって汚されなかった。彼らは童貞である。これらの者は、小羊がどこへ行かれるにも従う者たちである。彼らは人々の中から贖い出され、神と小羊にささげられる初穂となった。彼らの口には偽りが見いだされず、神の御座の前で傷のない者たちである。黙示録 14:1-5

エリヤに代表される、終わりの日に決して死なない礼拝者の一群は、罪に完全に打ち勝っている。これは、契約の使者によって彼らにもたらされる清めの火が、レビの子らから

パン種を徹底的に焼き出して取り除くからである。

見よ、わたしは使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが求める主が、突然その宮に来られる。あなたがたが喜ぶ契約の使者も。見よ、彼は来る、と万軍の主は言われる。しかし、彼の来る日をだれが耐えられようか。彼が現れるとき、だれが立ってられようか。彼は精錬する者の火のようであり、洗濯する者の灰汁のようである。彼は銀を精錬して清める者として座し、レビの子らを清め、彼らを金や銀のように精錬する。彼らが義にかなったささげ物を主にささげるためである。そのとき、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日々、いにしえの年のように、主に喜ばれるものとなる。マラキ 3:1-4。

「昔の日のように」とされるささげ物とは、五旬節の二つのパンの揺り動かすささげ物である。これはささげ物として高く掲げられ、街路で殺された二人の預言者を指し示し、その二人は日曜法危機の始まりに、旗印として天に上げられる。

アロンが自分の金の子牛を作ったとき、彼はその子牛こそ彼らをエジプトから導き出した神々だと宣言し、主への祭りを告げた。

彼は彼らの手からそれらを受け取り、鑄て子牛の像を作った後、彫刻刀でそれを形作った。すると彼らは言った。「イスラエルよ、これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神々だ。」アロンはそれを見ると、その前に祭壇を築き、布告して言った。「明日は主への祭りである。」出エジプト記32章4、5節

北王国イスラエルが南王国ユダから分裂したとき、イスラエルの初代の王ヤロブアムは、二つの町に偽の礼拝儀式を意図的に導入し、アロンと同じ宣言をして、自分の二頭の子牛こそ彼らをエジプトから連れ出した神々だと主張し、またアロンがしたように偽の祭りを制定した。

ヤロブアムは心の中で言った。「今や王権はダビデの家に戻ってしまうだろう。もしこの民がエルサレムの主の家の上っていけにえをささげるなら、この民の心は再びその主人、すなわちユダの王レハブアムに向き、彼らは私を殺して、再びユダの王レハブアムのもとに帰ってしまう。」そこで王は相談し、金の子牛を二頭作って民に言った。「あなたがたがエルサレムの上って行くのは大変だ。イスラエルよ、見よ、これがあなたをエジプトの地から導き上ったあなたの神々だ。」彼は一つをベテルに据え、もう一つをダンに置いた。このことは罪となった。民はその一つの前で拝むために、ダンにまで行ったからである。彼は高き所のための家を造り、レビの子孫ではない民のうちの最も卑しい者たちを祭司に任じた。ヤロブアムは第八の月の十五日に、ユダにある祭りに似た祭りを制定し、祭壇でいけにえをささげた。彼はベテルでもそのように行い、自分が作った子牛にいけにえをささげ、また自分の造った高き所の祭司たちをベテルに配置した。こうして彼は、第八の月の十五日に、すなわち彼が自分の心で考え出して定めたその月に、ベテルで自分が造った祭壇の上でいけにえをささげた。彼はイスラエルの子らのために祭りを制定し、祭壇でいけにえをささげ、香をたいた。列王記上12:26-33。

ダンは「裁き」を意味し、国家を象徴する。ベテルは「神の家」を意味する。アロンの反逆においてもヤロブアム王の反逆においても、これらの象徴は、最終的にアメリカ合衆

国における日曜法で生じる教会と国家の結合を指し示している。

日曜法はアドベンチズムの終わりに起こり、またアドベンチズムの始まりにおいては、1844年の夏にプロテスタントの角と見なされていたその運動が、共和主義の角と法的に結びついた。したがって、アロンとヤロブアムの反逆は、1863年と、間もなく到来する日曜法の双方を表している。

契約の使者が「レビの子ら」を清め、ほかのどの部族でもないのは、アロンの金の子牛の反逆のときにモーセの側に立ったのがレビ人だったからである。彼らの忠実さのゆえに、彼らは祭司職を代表する部族とされた。この栄誉は、それ以前には各部族の長子によって構成されるように定められていた。だからこそ、ヤロブアムは自分の偽りの祭司職がレビの子らに属さないようにし、代わりに「レビの子らではない、民のうちの身分の低い者」から祭司を立てた。

レビの子らとは、日曜法の危機のさなかに、旗印として、または揺り動かす献げ物として、火によって清められる者たちのことである。終末の時代における日曜法の危機の歴史は、1863年の危機、すなわち新たに認識されたプロテスタントの角が共和主義の角に法的に結び付けられたときによって、予表されていた。これから先ほど参照した箇所を検討し始める前に、もう一つ取り上げるべき歴史の筋がある。

その線は1856年を示しており、その点は次回の記事で取り上げます。

ダニエル書8章14節に示されている、聖所の清めのために私たちの大祭司としてキリストが至聖所に来られること、ダニエル書7章13節に示されている人の子が「日の老いたる者」のもとに来られること、そしてマラキが予告した主がご自分の宮に来られることは、いずれも同じ出来事の描写である。また、これはマタイ25章の十人の乙女のたとえにおいてキリストが述べられた、花婿が婚礼に来ることによっても表されている。『大争闘』426ページ。